

ずいそう



古都・マラッカ

渡辺博明

1991年4月30日、午後1時、私はマレーシアのマラッカ市街地から15 km北部にあるマレー鉄道の小さな駅 Tanpin Station で Singapore 行の列車到着を待っていた。

受注が決定したマラッカの Golden Valley Golf Resort & Country Club (54ホール) 造成予定地の原地形視察を終え、ひとまずシンガポールに帰る際、マレー鉄道国際列車を体験利用しておく必要もあると考えたからです。

その当時はマレー半島を縦断する North South Highway は未開通で、マラッカからジョホールバル経由シンガポールへの陸路としては、旧国道を南へ車で約6時間(230 km) 走るか又はマレー鉄道を利用するかのどちらかであった。

約1時間半遅れで(この程度の遅延はよくあること?) ようやく列車が到着、前日に指定席予約していたエヤコン付車両(2等車)を駅プラットフォームの端から端まで探しても見当たらないので、車掌に尋ねると、な、……何と「今日は冷房車両を連結するのを忘れた」である。

我慢して熱風吹き込む普通車両に乗り込み、熱帯雨林のジャングルやパーム椰子、ゴム園などの間を縫うように走る列車でようやくシンガポール駅に着いたのは夜の11時を過ぎていたが、車窓から次々に見える自然あふれる風景など、それは非常に貴重な体験であった。

それから1ヶ月後、ゴルフ場造成工事着工、私のマラッカでの生活が始まりました。

首都クアラルンプールから140 km南に位置したマラッカ海峡に面した街マラッカはマレーシアで最も歴史の古い都市で、香辛料、錫、絹などの貿易港として古くから栄え、良港であるが故にポルトガル、オランダ、イギリスなど当時の海洋大国による統治時代を経て、1956年に初代首相トUNK・アブドゥール・ラーマン首相がマラッカ市内にある旧イギリスのマラッカクラブにおいてマラヤ連邦の独立宣言宣誓をし、翌1957年にイギリスがその独立宣言を受け入れたゆかりの地で、現在その建物は「独立宣言記念館」として独立を勝ち取るまでの苦悩

とエピソード、条約文書、領土地図等々が展示・一般開放されている等、とても興味深い史跡名所がたくさんある。多民族国家マレーシアの人口は約2,200万人で、マレー系60%、中国系30%、インド系他10%、などで構成され、マラッカ州の人口は約60万人で市街地のマラッカ海峡に面した浜辺にはポルトガル系住民の定住区もある。

マラッカでの当時の生活を思い出しながら、楽しかったことなどを述べてみます。

King of Fruit と呼ばれるドリアンはトロピカルフルーツの中でも特に美味しい。マラッカでは5月頃と11月頃の年2回ドリアンシーズンがあり、シーズン中は2トントラックに満載した「ドリアン売り」の露店商が街のあちこちに出没する。

ある日、日本から観光でこられたS先輩ご夫婦が「ドリアン！食べたい！」とのご希望で、ホテル持ち込み禁止であるため私の宿舎に持ち帰り、食することになった。

ドリアンははかり売りで、大きさにもよるが平均1~1.5kg/個で、10マレーシアドル/kgが当時の相場であった。

お腹の出たチャイニーズの「ドリアン売り」が、3個程をはかりに乗せて我々の目の前で計量して見せるが、どう考えても重過ぎると思ったので2回、3回と、繰り返し量らせると毎回少しずつ微妙に重さが違うのである。4回目にその原因が判明した……。何と、ドリアン売りの奴め、トラック上のはかりの裏側で中腰になり、計量の都度、相撲取りが立会い仕切るような仕草で自身のデカイ腹をドリアンに押さえ付け、我々に面した計針を上から覗き込み、「一緒に針を見ろ」とばかりに仕掛けるのである。嚴重抗議したがその滑稽さに笑いが止まらず、「ヤルならもっと上手にヤレ！」と言って買ってやりました。ドリアンのトゲでさぞかし腹も痛かろうに……全く憎めない可愛い奴だったのに……その後、同じテクニックでマラッカ在住日本人会の奥様連中に売りつけ、ポリスに報告され「捕まった」とのことであった。

ご参考までに、マレーシアの警察官の大半はマレー人で、チャイニーズのポリスは殆ど見かけない。その理由は、悪いことをしたチャイニーズを同じ血統のチャイニーズが捕らえることはチョット……云々である。何となくこの国の面白さが解るのでありました。

オット！ここまで書いて誌面が足りないのに気がつきました。

古都・マラッカの簡単なお話と「ドリアン売り」のお話で終わりにになりましたが、この続きは又、機会があれば……。